

膚は拒絶された。免疫組織染色の結果、凍結保存群、低温保存群ともに IgG, IgM, C3 の沈着を認めた。しかし低温保存群は凍結保存群と比較し IgG, IgM, C3 ともにより高度な沈着を認めた。

9. 急性心筋梗塞の心筋傷害における nitric oxide と peroxynitrite の関与

(第二病理) 下條 隆・石山 茂・
竹田和代・西川俊郎・笠島 武

To investigate whether the nitric oxide (NO) is involved in the myocardial damage in acute myocardial infarction (AMI), ventricular myocardial tissue of autopsied cases with myocardial infarction was examined by immunohistochemical staining with anti-inducible NO synthase (iNOS) and anti-nitrotyrosine antibody.

The damaged residual myocardium were positively stained with anti-iNOS antibody and anti-nitrotyrosine antibody in AMI. These findings were not obtained in the myocardial tissue of patients who died shortly in the early stage when myocardial cells reveal contraction band necrosis with minimal inflammatory cell infiltration. And also they were not obtained in patients with old myocardial infarction.

Since iNOS development accompanied by cell infiltration was noted in the damaged myocardium and nitrotyrosine was also disclosed in the same area, it is suggested that not only NO but also peroxynitrite is involved in myocardial damage in AMI.

10. Menkes 病剖検小脳における superoxide dismutase の免疫組織化学的検討

(第一病理) 柴田亮行・小林慎雄

Menkes 病におけるフリーラジカル傷害の関与を探るため、剖検小脳を用いて superoxide dismutase (SOD) の局在を免疫組織化学的に検討した。死亡時 1~2 歳の Menkes 病と対照群各 5 例の小脳のパラフィン切片に免疫染色を施した。一次抗体にはヒト Cu/ZnSOD ならびに MnSOD に対するウサギ抗血清(山梨医大小児科朝山光太郎博士から恵与)を用いた。Cu/ZnSOD は対照例の Purkinje 細胞に陽性、Menkes 病例で陰性であった。MnSOD の免疫活性は対照例では弱かったが、Menkes 病例では Purkinje 細胞に高度であった。Menkes 病では銅欠乏により銅要求酵素で

ある Cu/ZnSOD や cytochrome c oxidase の活性が低下するといわれており、電子伝達系からの superoxide radical の発生量増大によりミトコンドリア型 MnSOD が誘導されると考えられた。

11. 東京女子医大におけるレニン産生腎傍系球体細胞腫の第 1 例

(第二内科) 田辺晶代・成瀬清子・
長谷充康・吉本貴宣・田中正巳・
新井桂子・成瀬光栄・出村黎子・出村 博
(泌尿器科) 東間 紘

傍系球体細胞腫はこれまでに約 45 例の報告があるのみの極めて稀な二次性高血圧である。今回我々は、径約 8mm の傍系球体細胞腫を経験したので報告する。

症例は 31 歳男性。24 歳時に高血圧 (160/110 mmHg) を指摘され、以来降圧剤の服用にて血圧のコントロールは良好であった。31 歳時血漿レニン活性 (PRA) を測定したところ高値 (54.4 ngAng I/ml/hr) であり、生食負荷時 PRA の抑制不良が認められた。MRI にて右腎上極に径約 8mm の腫瘍陰影を認め、右腎静脈血中 PRA が対側に比し明らかに高値であったことから、傍系球体細胞腫を疑い右腎臓部分切除術を施行した。摘出組織は病理学およびレニン抗体による免疫組織学的検討から、傍系球体細胞腫と診断された。

これまで傍系球体細胞腫は比較的大きな腫瘍の報告が多いが、本症例のような小腫瘍で、術前に局在診断が可能であった例は少ない。

12. クッシング症候群副腎皮質病変の病理学的検討

(第二病院病院病理科) 相羽元彦・
飯塚英治・五十嵐昭喜・橋本正徳・須賀道恵

ヒト aldosterone synthase cytochrome P-450 (P-450_{aldo}) と 11 β hydroxylase (P-450_{11 β}) に対する家兎 polyclonal 抗体 (慶応大医化学 三谷講師供与) を用いて、副腎新鮮凍結切片を envision system により免疫染色し、種々の病態のクッシング症候群の副腎皮質を原発性アルドステロン症と比較した。

〔結果〕コルチゾル産生副腎皮質腺腫は P-450_{11 β} は陽性だが P-450_{aldo} は陰性、ACTH 非依存性大結節性過形成性や原発性副腎皮質小結節性異形成の結節部、ACTH 依存性過形成性の索・網状層も同様の染色 pattern を示した。アルドステロン産生腺腫は P-450_{aldo} と P-450_{11 β} が両者とも中等度の染色性を示した。非腫瘍部の球状層は、種々の割合で (僅かに単状/楔状/比較的多く破線状に) P-450_{aldo} の強い染色性と P-450_{11 β} の陰性または弱い染色性を示した。